

✿ 発掘調査の概要

藤原宮朝堂院東第六堂(飛鳥藤原第136次)

藤原宮(694～710)の中枢部である大極殿院・朝堂院は、すでに戦前～戦中にかけて日本古文化研究所によって発掘調査がおこなわれています。しかし、この調査は柱の想定位置だけの発掘だったため、建物の細部など不明な点が残されていました。そこで当調査部では、7年前から平面的な発掘調査をおこなっており、今回はその8回目にあたります。

調査対象は朝堂院の東第六堂。朝堂院は国家的な政務や儀式・饗宴の場として使われた臣下の空間で、天皇の空間である大極殿院の南方に位置します。ここには12棟の朝堂が東西対称に並んでおり、東第六堂はもっとも南に建つ東西に細長い建物です。また、朝堂は、役人の着座する場所が決まっており、平安宮(794～)の例をみると、東第六堂は、民政・租税徴収などを掌る民部省・主計寮・主税寮に属する役人の座があったと推定されています。

今回の発掘調査は、東第六堂の全容を明らかにするため、南北31m・東西67m余、面積2,062㎡の調査区を設定しました。藤原宮朝堂の再発掘は、これまで東第一堂・東第二堂・東第三堂と進めてきましたが、土地や水路などの関係から、建物の半分程度の発掘しかできませんでした。今回は念願かなって、はじめて朝堂の建物全体を発掘しています。調査は昨年10月から始めましたが、今年1月～3月に一時中断し4月に再開。8月になってようやく全貌が明らかになってきました。

まず、東第六堂は、基壇上に建つ瓦葺きの礎石建物で、南北に庇がつき、切妻造の屋根をもつことが確定しました。規模は、間口(東西)12間(約49.1m)・奥行(南北)4間(約11.2m)という長大なものです。これは第二～第四堂の、間口(南北)15間(約60.9m)に比べると一まわり小さいのですが、写真からもわかりいただけるように、なかなかの大きさがあります。じつは藤原宮の朝堂院は、南北約320m・東西約235mにおよび、日本の都城のなかでもっとも広い空間を占めています。そして、朝堂の建物自体も巨大であることが特徴なのです。

柱位置には直径約1.5～2mの穴を掘り、拳大から人頭大の石を詰め込んで、中央部には礎石底部の凸凹にあわせて二・三重に積み上げていました。礎石

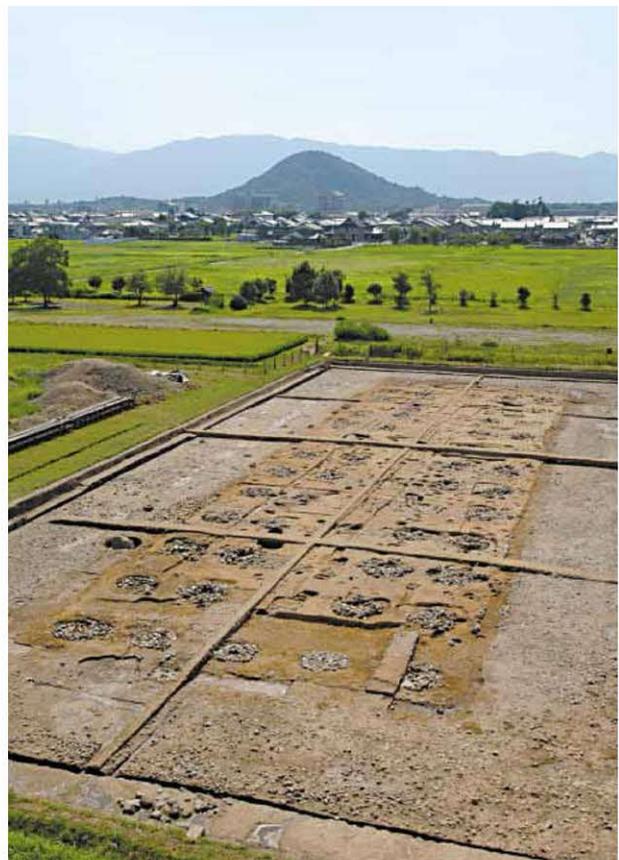
は大部分が持ち去られていますが、そばに穴を掘って落とし込んだものが2個あります。いずれも花崗岩製で、長さが約1m・幅と高さは約80cmを測る大形のものでした。

基壇の外周部はやや低くなっており、礫が敷かれていました。朝堂院の中央部は広大な庭(朝庭)で、役人たちが列立することになっていましたので、地面がぬかるむのを防ぐために礫が敷かれたものと思われます。

また、藤原宮から平城宮に遷都した際、東第六堂の瓦はリサイクルされましたが、使用不可能な瓦は基壇外周部に捨てられたようです。今回の調査では、現在のところ、コンテナ(62×40×16cm)で3,000箱以上にのぼる膨大な量の瓦を取りあげました。藤原宮は日本で初めて瓦葺きを採用した宮殿ですが、その生産や運搬には多くの労苦を伴ったのだらうと、瓦詰めのコンテナを運ぶたびに実感しています。

調査はまだまだ続きます。私はこれまで東第二堂・第三堂の発掘を担当してきましたが、調査の最終段階で思いがけない発見に遭遇し、予定どおり現場が終わったことがありません。今回はどんな発見があるのか、恐ろしくも楽しみです。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹)



藤原宮朝堂院東第六堂(北東から) 背後は畷傍山